



皆さんこんばんは。

厚木クラブは2004年にチャーターされたのですね。なかなか厚木に来る機会がなく、特にワイズの皆さんとは久しぶりにお会いするわけですが、前総主事として在任中大変お世話になりました。ありがとうございました。

私は1979年から1985年4月まで相武台（小田急沿線）に住んでいました。最初日本YMCA同盟に勤めましたので、小田急線の本厚木発の準急電車で、当時は座ることができましたので、座って通っておりました。その後、横浜YMCAに移ることになりましたので、海老名駅経由で横浜関内へと通いました。電車の中からの雪をかぶった丹沢の山々や、まだ人家が少なく広く続く田んぼが印象に残っております。本日厚木にきてみて、横浜より寒いのにびっくりしました、あの当時と変わらないなと実感しました。そんなことを思い出し、なつかしみながらここにやってきました。

田口堅吉さんの「12月厚木クラブ特別例会の栞」には、私のプロフィールと、何故今回私を招いたか書いてありますので、皆様方に読んでいただくことにして、その中に書いてあることで、ご存知ない方もおられると思いますので、念のために申し上げます。私が昨年9月、NHKラジオ深夜便「こころの時代」という、朝4時から45分間の深夜のラジオ番組に9日と10日の2日間連続で出演いたしました。そのきっかけというのは、ここに持ってきましたが、「横浜青年」の「爽風」という欄に10年間毎号書き続けてきたものを、私が横浜YMCAの総主事を退任する時、実行委員会の皆さんが折角10年いたのだから、何か残してあげようと本にしてくださいました。

私は自分の載せたものをまとめて束にして持って帰っていけばいいかなと思っていましたが、それがこのような本にさせていただいて、NHKのディレクターの鈴木健次さんの目にとまったんですね。鈴木さんは大和YMCAの運営委員をさせていただいて、カンパーランド教会の方ですが、YMCAで私とは面識があり、なかなか面白いというので、山根の話を知ろうかということでラジオ放送に出るということになったのです。

そのときも、私は鈴木さんがインタビューしてくださるので、ただ黙って行けばいいのかなと思っておりましたら、なにが話したいか、この本の中から探して決めなさいといわれて、私が大体こういうこ

とで行きましょうねと話して、渋谷のNHKへ行って鈴木さんとインタビュー形式で録音をしました。45分間の対談が一つずつ二回分になりました。私の選び方が上手だったのか、実録は47分か48分で終わっていて、対談の中の「ええ」とか「あのう」とかを削ればほぼ45分に話がまとまりましたので、見事に放送されました。

放送されてまたびっくりしました。私は朝4時という時刻にはかかって起きたことがありませんでしたので、ラジオ深夜便というものを聞いたことがなく、人も余り聞いていないものと思い込んでいたんですね。当日は私も目を覚まして一生懸命に聞いたのですが、実はその放送がされてから、YMCAの電話が鳴ること鳴ること、それはNHKに問い合わせがあって、紹介されてYMCAに「あれはとってもよいお話だった、面白かった。爽風という本を手に入れたい。」といった電話が全国からかかってきたわけです。

YMCAの事務局では、商魂たくましく一冊千円で振り替え用紙を入れて送ったのですが、千円どころか何千円も送ってこられた方もいました。そんな問い合わせが余りに多かったものですから、これならきっと売れるだろうということでNHKでは「深夜便 こころの時代」第10号に珠玉の放送13編の1編として載せて、今年（平成21年）1月に売り出されました。対談全体の三分の一弱が載せられています。まだ在庫はあると思いますが、お買い求めいただかなくても、今日の私の話を聞いていただければ結構です。

（注：「爽風」という本は、山根総主事のご退任の際、感謝の集いの実行委員会が、感謝の印として、横浜YMCAの月刊紙「横浜青年」の「爽風」欄を本にして総主事に差し上げようとして事前に準備し、感謝の集いの会場で総主事に贈られ、参加者にも配られたもので、非売品で値段はついていませんでした）

私は田口さんからお話いただいた時、やはり皆さん方にこの「爽風」のことを少し引用しながら、話をさせていただきたいと思って今日を迎えました。

クリスマスの月を迎え、先ほども話があり、お祈りもありましたが、クリスマスは、イエス・キリストの降誕したということで注目を浴びますが、イエス・キリストを実質的にこの世に、いわば存在せしめたのは洗礼者ヨハネですね。ほぼキリストと同時代、荒野つまり砂漠で、ラクダの衣を着て、蝗と蜂蜜を主食とした生活をしていました。

確か大山に登りますと上のほうで蝗の缶詰を売っておりまして、私も食べたことがあります。毎日蝗をそれも缶詰に加工されていないものを食べるということは大変なことだと思えますし、蜂蜜だってそんなにふんだんにあったわけではないでしょう。ラクダの衣の下に何か着ていたか知りませんが、寒暖の差の激しい砂漠で蝗と蜂蜜を主食としての生活は極めて質素な厳しい生活であったといえるでしょう。

このヨハネという人が、自分よりはるかに優れた人が現れるといい続けるわけですね。そして自分は大変質素な生活をする。そういう状況の中で、イエスが現れ、ヨハネから洗礼をうける。こうして初めてイエスは神の子として存在していくような形になる。イエスがヨハネを選んだ。そしてイエスも決して豊かな生活を求めていませんね。近頃エコ、エコといわれていますけれど、もっともつと乏しい貧しい生活を、本当に貧しい、乏しい人々の横に座って送っている。イエスや洗礼者ヨハネが実践して、私たちにこういう生き方もあるんだよといいつづけていたんだということを、クリスマスの季節を迎えるとイエス・キリストの誕生ということと同時に私はヨハネの厳しい生活のことを思い出しています。

実は私は1963年に学校を卒業して、川崎の武蔵中原にある富士通に就職しました。そのあと九州の熊本YMCAにぜひ来ないかと誘われました。学生時代リーダーをしておりまして、富士通もいいところでしたが、やっぱり子どもたちとキャンプをしたり、身体の不自由な子どもたちといっしょに働いたりすることが大事なと思い熊本で十年働き、今度は本田技研が人事の仕事で中間管理職を募集しているということで、応募して本田技研に入りました。本田技研では皆さん定年まで働いたり、25年以上働くとOB会に加えてもらえるのですが、私は5年しか働いていないのですが、OB会にどうしてもということで特例で入れてもらっています。11月の終わりにOB会からいろいろな案内がありました。その中にホンダのハイブリット車のインサイトを買わないかとありました。

私も長い間お世話になったのだし、近々熊本に行くこともあるから、買おうかな、どうしようかなと思いました。OB会の事務局へ問い合わせをしました。事務局長は私の部下だった人で、ぜひといわれて、ずいぶんその気になりまして、ホンダの販売店をみてまわりましたが、インサイトはハイブリット車で環境に優しくいいなと思ったんですが、よく考え

た末に、買うことをやめました。それは色々いい点があるにしても、ハイブリットといえどもガソリンを使うのは間違いない。この事実を思い、必要ないときに乗ってしょうがない。せつかくホンダから言ってきたのだから、そろそろ付き合ってあげないといかんなどは思いましたが。もちろん昔はアコードとか、シビックだとか、ホンダの車に乗っておりましたが、今は横浜にいて、何ヶ月、何年いようと、横浜には地下鉄もあり、電車もあり、必要ないから、買ってはエコにならない。自分もホンダにお世話になったからという気持ちがあるが、やっぱり自分自身の気持ちのどこかで、車が欲しいなと思うところに、今の時代の中で自分が反省すべき点があるのではないか。「やめよう、ごめんね。また必要となったら買うから」と電話しました。そういうことでエコの生活が、これからどうできるかわかりませんが、皆様方とお互いに一緒にやっていきたいと思えます。

ところでオバマ大統領が核廃絶ということを強く訴えて、これから、それに向かって努力していくということで、ノーベル平和賞を受賞したわけですが、しかし政治というのは現実にはそう簡単ではない。結局、アフガニスタンに新たに3万人を派兵すると。しかし期限に定めがないと困るということから、2011年に撤収を開始するというをいって、いわば正義のための戦いというものはあるという論理づけをして、平和賞の演説をしましたが、私は2001年9月11日の米国の同時多発テロのあと、「爽風」に皆さんご存知の金子みすずさんの「大漁」という詩を選んで文章を書き横浜青年の11月号に載りました。

この詩で金子みすずさんは再発見され大変有名になりました。

「大漁」
朝やけ小やけだ大漁だ
大ばいわしの大漁だ
はまは祭りのようだけど
海のなかでは
何万の
いわしのとむらいするだろう。

(金子みすず詩集より)

これはほんとうに光と影というか、金子みすずさんという人は光と影の両面をいつもみておられますね。この詩はほんとうに同時多発テロで、あのビルが倒れた時に、きっとこれは大漁だ！ということで、お祝した人があったかも知れないけれども、そこでは三千人以上の人たち、家族も含めたら何万人以上という人の弔いがありました。

しかしその後、今度は米国がアフガニスタンを攻撃いたしました。そこでは本当に何の罪もないアフガニスタンの多数の民衆が命を落としました。あっという間に米国はアルカイダを追い出して勝利の宣言をいたしましたね。しかしその時、どれだけ海の中で弔いが、即ちアフガンの地で弔いがあったことでしょうか。

アメリカで、アフガニスタンで、沢山の弔いがあるという事実に目を向けずに、成果だけを見る。そういうことが私たちの世界にはあるような気がします。

丁度その年ですね、YMCAとYWCA合同祈祷週間がありました。そのときのテーマが次のような祈りだったのです。

「飢えと貧困、病と死が、生きることを耐え難い重荷にしているところで、恵みの神よ、あなたの光をお与えください。疑いと憎しみ、いさかいと戦争が善意と友情を妨げているところで、平和の神よ、あなたの光をお与えください。」これが世界YMCA、YWCAのその年の祈祷週の主要な祈りでありました。

そのあと丁度横浜YMCAが110周年を迎えたのです。その前年にはワイズの皆さんには受付から全部やっていただいて、日野原さんの講演を聞きましたが、110周年の年には、アフガニスタン、パキスタンで医療、農業活動のペシャワール会、伊藤青年がなくなったあのペシャワール会の責任者のドクター中村哲さんをお招きして110周年記念講演をしていただきました。この方はもちろんクリスチャンで、任侠の火野葦平の親類筋に当たる方で、現在も現地に踏みとどまって活動を続けておられるのですが、そのとき話された言葉がとても印象に残りました。

「自分はアフガニスタンで民衆とともに生活しているけれども、武力は人々に絶対になじまない。大事なことは民衆が生きていけるようにすることだ。そこで私たちは農業を医療活動に加えてやってきた。一方日本の自衛隊はインド洋に派遣され給油活動をして、アフガニスタンを爆撃し、イラクを攻撃している国々の艦艇に給油しているわけで、そうして守ろうとしているのは、結局日本の経済活動であり、そうやって日本の石油を確保しようとしている。軍事をもってしなければ生きていけない社会というのはおかしいのではないか。そうやって武力を使ってまで、他国より豊かな生活をしたいというのは間違っているのではないかと。そういう思いが金子みすずさんの「大漁」という詩から浮かび上がってまいります。

その次に2002年10月に私は高見順さんの詩を選びました。この方は「敗戦日記」で有名な方です。「天」という詩です。

「天」
どの辺から天であるか
鳶の飛んでいるところは天であるか
人の目から離れて
ここに
静かに熟れゆく果実がある
おお その果実の周囲は
既に天に属している（作詞 高見 順）

私はこの詩を読んで、天というともっと高いところを思いますが、高見 順さんはまさに鳶が飛んでいるところは天だ、そこに静かに熟れている果実があって、その果実の周囲はすでに天に属していると。どういうことでしょうか。私は別に解釈をするつもりはありませんが、神様が自然の恵みで作ってくださる果実。これはまさに天に属するのではないか。私たちはいろいろなものを欲しがったり、いわば経済活動で、宝を奪ったり、いろいろなことをしようとする。お金も欲しがります。でも本当は天に属しているものばかりなのに、果実だって、野菜だって、肉だって全部が天に属している。そこから「いのち」を与えられているのに、それを私たちは奪い合ったり武力で取ったりする。脅迫して取ってきたり、奪い合ったりしているとすれば、天から与えられたものを、そういう形で本当によいのか、私はこの詩を読んでしみじみそう思います。

イラク戦争も、時のチエニー副大統領は大石油会社の資本家の一人ですよ。それで政権にはイラクの石油利権を得たいという思いがあったといわれています。まさに天に属するものの典型のような石油を力で得るということが一体どういうことなのか、しみじみこの詩を読んで感じたことがありました。

たとえば土地というものを考えてみれば、誰がつくったのか、私たちは信仰的には神様だと思いますが、大土地所有者が土地を作ったわけではない。結果的にさかのぼっていけば、力の強い人たちがそれを奪って、そこに権力を持ち、あるいは国を奪ったり、国境を引いたり、境界線を引いたりという形で土地がある。それを高値で売ったり買ったりするとはどういうことかと今でも思ったりします。

私は短歌を読むのが好きですが、これも爽風に書きました。2004年2月に二句紹介しました。同年1月に朝日新聞に発表されたものです。

黙禱や半旗で済ますな 死なせる為に
生んだのではない どの母親も
（三島市 淵野里子）

イラク攻撃反対運動というのはイラクへ派遣された息子が戦死したあと、母親たちが積極的な反対運動を起こし、大きな声となっていきました。それを歌ったものですね

撃つために 撃たれるために 生まれしや
熱き沈黙に 粉雪の積む (上越市 三浦礼子)
これもきっとイラク戦争をみて、上越の寒い冬、
粉雪の時、読まれた詩でしょう。

私は1941年の生まれですが、4歳の頃、熊本で空襲を受け、我が家に焼夷弾が落ち、一心に逃げたことを記憶しておりますが、父親は上海でなくなっておりましたので、戦後、母親一人子ども4人の生活の中で、小学校1~2年の頃からアルバイトをしていた。小学4年の頃は街頭で新聞売りをしていましたので、戦争のもたらすものがどんなものかは物心つく頃から判っておりました。当時夕刊が3円、市内電車が7円、市内電車のキップ売り場で3円のお釣りをもらう人を狙えば絶対売れると、その頃からマーケティングを考えていました。戦争がもたらした、横には浮浪児、戦災孤児ですね、がいて「おじさんそのつり銭の3円を恵んでくれ」とせがんでいる。当時私は傲慢でしたので、おじさんから貰おうなどと甘いことを考えず働いて稼げと、新聞を投げ出して喧嘩したこともありました。今考えてみれば反省もあります。貧しくとも私には母親がいる、彼には両親がいない。そういう意味でこの二つの詩は、命を奪われるような戦争というものを、母の声できちんと抗議している。かって与謝野晶子も中国旅順港包囲軍の中にいる弟に「君死にたもうことなかれ」と切々に訴えていますね。

私は先ほど、質素な生活のことをいいましたが、隣の町の町田の八木重吉さんの詩、これはいつも愛読しています。たまたまラジオ深夜便を放送で聞かれた前の町田市長の寺田さんという方から自著の本とお手紙をいただきました。放送がとてもよかった。ぜひ八木重吉記念館においてくださいということでした。

「おだやかな心」
ものを欲しいと思わなければ
こんなにもおだやかな
こころになれるのかな
うつろのように考えておったのに
すこし味わってみると
ここから歩き出してこそ
たしかだとおもわれる
なんとなく 心のそこから
はりあいのあるきもちである (詩 八木重吉)

この詩で思い出しますのは、かつてYMCAにかかわってこられた方で、いまは油壺におられる方が、ある日私のところを訪ねてこられ、「山根さん、これ女房に黙って貯めたへそくりです。」と150万円をポンと出され、「横浜青年をずっと読んできたけれども、タイのパヤオの孤児たちのために使って欲しい。」と。当時は寄付金に対する非課税もなにもありませんでした。「これはほんのへそくりだから恥ずかしいから、みんなに名前を出さないで欲しい。もしまた必要なことがあったら少しはありますからいってください」と。決して豊かな生活をしておられるわけではない、質素な生活をしておられる方からの「人生長い間生きてきて、罪ほろぼしですよ」とおっしゃっての贈り物に私は心がジーンと熱くなりました。そしてこの八木重吉の詩を思い出しました。(この方の名は仮にSさんとしておきましょう。)

私は物にこだわらない一人ですが、YMCAも退職している。これから人生それなりに色々あると思いますので、準備をしなくてはいけないなと思っています。カタツムリのように殻を背負って、この世からさよならというわけには行かない。なるたけ何も無いほうがよい。私は母が亡くなった時に体験したのですが、残された写真、本人にとってはとても意味のある写真であるが、私にとって意味のない写真、私が取っておいても子どもたちには伝わりません。結局色々考えたすえ、母の物は記念になるものをほんの少ししか残していません。自分を振り返ってみたら、お金を除いて、なんと沢山なものを持っていることでしょう。でもこれからの人生を、私はSさんのように「罪滅ぼしですよ」「へそくりですよ」これを使ってくださいという気持ちで、自分に与えられたものを少しずつでも、お役に立てたいし、物にこだわらないようにしていかなないとだめだなと思っています。実はYMCAにはそういう方が多いんですね。Sさんの話を代表としてお話したのですが、決して豊かでない方が「これは私の何々の記念日です」と富士山YMCAの募金として百万円をもってこられた。

子どもが成長するのに必要なお金でしょうに、それを持ってこられる。本当に不思議なことです。最初にヨハネとイエスの話しをしましたけれども、何も持たずにこの世に生まれてきて、何も持たないで、生きていけない人々にたくさんのものを与えていく、そういうことを考えた時、「おだやかに」という詩は大事なことだと思います。

ところで、星野富弘さんという人は、皆さんよくご存知の方だと思いますから、彼のことはあえて紹介いたしません。私の一番印象に残っている詩はこれです。

「いのち」
いのちが 一番大切だと思っていたころ
生きるのが 苦しかった
いのちより大切なものがあると知った日
生きているのが嬉しかった
(「花の詩画集」 星野富弘)

私は「いのち」ということで、イエスの生き方がそうだったんだなぁと思います。「いのち」が大切だと思ったら、ゲッセマネの祈りで、血のにじむような祈りをしたあと、十字架につかなかっただろう。でもイエスはやっぱり「いのち」より大切なものがあると思ったから、できることなら、この盃を取り去ってください、十字架につけないでくださいと神に祈りながら、しかし結局十字架についていった。自分の「いのち」を大切にしていない。自分の「いのち」すら譲った。このイエスの生き方を、私が考えていた時、星野富弘さんの「いのち」という詩が心にじんときるようになりました。私たちが物をほしげらない生き方、「いのち」というものをどう見るかが大事なことだと思いました。

最後にもう一つ紹介したいものがあるのです。ご存知の方が多いと思いますが、最後は国際基督教大学の総長だった湯浅八郎さんです。徳富蘇峰、蘆花、この兄弟はキャプテン・ジェーンズが開いた、後に熊本バンドにつながる「熊本洋学校」で学び、兄は国粹主義者、弟はクリスチアンの小説家として有名ですが、その兄弟の姉の初子さんが八郎さんのお母さんであります。

湯浅家は群馬県の名家、初子さんのご主人の湯浅次郎さんは日本YMCAの設立に大変協力した人で、群馬県議会の議員をした熱心なクリスチャンで、群馬県が廃娼運動を県議会で議決した時の議長でありました。その次郎さんと結婚したのが初子さんで、八郎さんは八番目の子なので八郎と名をつけられた。

この湯浅八郎さんの言われた言葉「ゆるし」。これをラジオ放送するとき、著作権とかいろいろあるので、湯浅家に放送で引用していいかどうか問い合わせたところ、「話した言葉ですから構いません」との許可を頂きました。

「ゆるし」
生きることは愛すること
愛することは理解すること
理解することは許すこと
許すことは許されること
許されることは救われること

太平洋戦争のとき日本軍がシンガポールを占領して、昭南島と改名し、日本式の支配を行い、抵抗する人々をどんどん拷問、虐殺しました。その場所が、シン

ガポールのYMCAの建物でした。その後建物は建て直されましたが、YMCAの人たちはそこで何が行われたかよく知っています。そのうえで私の在籍した熊本YMCAと交わりを持ってきて、姉妹関係まで結ぶようになりました。その根本にあるのはシンガポールの人たちの大切な考え方「許そう、でも忘れない」によるものです。中国も敗戦で逃げ出す日本人たちに厳しい仕打ちをしていない、それは当時の中国の指導者が国民に向かって「許そう、でも忘れない」と訴えたからだと聞いております。

私がかつたシンガポールを訪れた時、「シンガポールが昭南島と呼ばれた時」という展覧会が、YMCAの近くの国立博物館で国の主催で行われており、見るのがとてもつらかったが、いってみました。会場を見て廻り、forgive、but never forget、こういうことが起ってはならない、しかし犯したこと、犯した人を許そうではないかと政府も言い、人々もそう思っていることがよくわかりました。

2001年の同時多発テロくらい、もう許せない、許さないという言葉が実に頻繁に使われるようになったように思います。悲惨な事件の、被害者の思いはわかりますが、報道や世間一般までも、この言葉を頻繁に使っているように思います。

イエス・キリストは十字架の上から自分を苦しめる人たちの「許し」を祈ったのでありますが、イエスの教えの中にはいつも「許す」という言葉があります。ルカ伝7章には「赦されることの少ない者は、愛することも少ない」とあります。

手帳の高橋商店の手帳大賞 名言・格言部門の応募作品の中に、小さな子どもが何度注意しても、いたずらばかりするので、父親が怒り「何度言っても、叩いても、わからんなら、お父さんは一体どうすればいい？」との問いに、子どもは涙を流しながら一言「ゆるせばいい」。

これが大賞に選ばれて、賞品をもらったのですが、名言だなあと思いました。子どもは許されて初めて独り立ちする。私は人にきついことを言う、と人は言います。YMCAの世界では、厳しいことを言はなくてはならないとき、厳しいことを言い合うときもあります。最後は許しあって生きていくところではないかと思っています。皆さん方もワイズメンの世界の中で考え方の違いとかいろいろありますが、やっぱり許しあって生きていくということが大切ではないかと思っています。本日は何でも好きなことを話せということでざっくばらんにお話ししました。(厚木クラブ:2009年12月16日卓話)

*おことわり:タイトルの「爽風談話」はワイズ文庫編集者の命名です。